

宝塚市協働のまちづくり促進委員会	
協働の仕組みづくり検討部会(第14回・第3期第3回) 会議録	
開催日時	平成30年6月7日(木) 18:30~20:45
開催場所	宝塚市役所3階 特別会議室
次 第	1 開 会 2 企画経営部からの説明事項 (1) 第6次宝塚市総合計画策定方針(案)の概要について 3 議 事 (1) まちづくり計画見直しガイドラインに対する意見の回答について (2) まちづくり計画見直しガイドライン(案)の確定について (3) 今後の仕組みづくり検討部会の取り組みについて 4 その他 5 閉 会
出席委員	久会長、中山委員、溝口委員、藤本委員、飯室委員、野田委員、喜多委員、足立委員、平石委員、光村委員、加藤委員、成瀬委員、石谷委員、古村委員、福永委員
開催形態	公開(傍聴人2)、関西総合研究所1人、OM環境計画研究所1人

## 1 開会

事務局から、本日の出席者は14人、欠席者は4人であること、宝塚市協働のまちづくり促進委員会規則第5条第2項に規定する過半数の出席要件を満たしているため、会議が成立していること、及び傍聴希望者は2人であることを報告した(1名遅れて出席のため、最終出席者は15人、欠席者は3人)。

## 2 企画経営部からの説明事項

### (1) 第6次宝塚市総合計画策定方針(案)の概要について

企画経営部より第6次総合計画策定方針(案)について、概要資料に基づいて説明がなされた。本案作成にあたっては、懇話会を4回開催し検討したこと、本案の中で一番時間を割いて検討したことは、「まちづくり計画」の位置づけに関すること及び協働の計画づくりをどう実現するかであったことが報告された。

A(会長): 第6次総合計画の構造が、資料2頁に示されている。総合計画は、大きな方針や方向性をしっかり議論し、書いていこうとしている。具体的な取り組みについては、別途検討する。地域ごとのまちづくり計画の具体的な部分についても、行政と地域で調整しながら進めていく。

B: ポイントかなと思ったことは、地域ごとのまちづくり計画を総合計画にどう位置付けるかであった。この点について、第4次総合計画では別冊であったが、第6次総合計画では本体に入ることだ。基本計画と並列に置くなど、しっかりと位置づけら

れた。実施計画について、行政では1年で見直し、3年ローテーションでつくられる。地域としては、5年計画で具体的な取り組みを検討する。この両者の調整をしていくことになる。楽しく議論ができた。

- C (会長) : 2頁の図で分野ごとの位置づけについては「『基本計画』は行政でまとめます。」とあるが、分野別計画は行政が作成する段階で、市民の意見をしっかり聞いて作っており、それをスライドさせることで市民の意見が反映される。これまでは、総合計画でも分野ごとに検討していたが、重複を解消し、しっかりと連動させることを意識する。
- D : 策定方針(案)の本文4頁(5)に「まちづくり協議会を条例に位置づける」と明言されている。市の側で、市民自治の方針として条例への位置づけを明確に宣言された。
- E (会長) : 「『お互いさま』を育む計画づくり」とは、「エイジフレンドリーシティ」のことで、WHO認定を受けているので位置付けている。

### 3 議事

#### (1) まちづくり計画見直しガイドラインに対する意見の回答について

事務局よりガイドライン(案)に関する各まち協の意見に対する回答について説明した。

- A : 「ともに取り組んでまいります」は「い」が抜けている。「ともに取り組んでまいります」に修正。
- B (会長) : 予算の問題に関して言えば、まち協の資金は限度があるが、他の団体に他の部局から回っている資金をみると、1千万円ほどとなっている事例もある。他市では諸団体への資金を一本化して支給しているところもある。それをまち協で事業にふりわけるといふマネジメントができればよい。議論が一段落したら、どの団体にどのような資金が提供されているかを検討してもよい。
- C : 平成26、27年くらいに一度、コミュニティ参加団体の資金を合算したことがある。活動団体全てではないが、コミュニティは140万円、その他では会費も含めて1,090万円ほどあった。指定管理で受領しているものも含めれば3,500万円くらいになる。そのように見ていくと地域のお金の状況がよく見える。
- D : 行政が縦割りになっているが、地域もそれに呼応してさまざまな団体がある。行政から地域団体にどれぐらいの資金が支給されているかを共有したい。今回まちづくり計画を策定する上でも情報共有してもらえるとありがたい。

#### (2) まちづくり計画見直しガイドラインの確定について

事務局(委託業者)から、促進委員会以後に修正を行った点について、説明を行った。

- A : PDCAの「ACTION」が「反映」とあるが、本来の品質管理では「改善」が重要視されている。品質管理用語でもあるので、「改善」とすべきだ。
- B : 第5次総合計画には「反映」と注釈されていた。
- C : 「反映」の場合は多少の説明が必要となってくる。「改善」にも違和感がある。
- D : エイジフレンドリーでも「改善」としている。
- E : 二語にこだわらないのであれば、「改善・反映」にしてはどうか。「ACTION」してほしい。

いその本質は、「改善」にある。

F：地域で説明する際に「反映」だとやりにくい。一般的に活用されているものの方がよい。

G（会長）：では「改善」とするというだけでよいか。

全員：異議なし。

H（会長）：それでは、「反映」は「改善」と修正する。

I：反省会という文言があるが、いらぬのではないか。

全員：異議なし。

J（会長）：それでは、「反省会」は削除する。

K：15頁「机の配置は口の字型が適当」とあるが、口の字にしても必ずしも円滑に進むわけではない。「机の配置には工夫をしましょう」でどうか。

L（会長）：異論なければ修正する。

M：その上の「どこで」の位置づけが左は具体的な会場で、右は状況が書いてある。揃えるか削除するかすべきではないか。

N（会長）：ここで何を言いたいかだが、必要性は感じられないので削除してはどうか。

全員：異議なし。

O：目次に資料を追加しておいた方がよい。

P（会長）：追加する。

Q：ワークショップの人数が5～6人となっているが、数字が連続する場合は「～」を使うのは違和感がある。

R：参加者が多いというのが、各まち協ごとに程度が異なるので、「グループ」という表現のほうが良いのではないか。

S（会長）：「参加者が多い場合はグループに分かれて」でよいか。

全員：異議なし。

T（会長）：他に修正点はないでしょうか

U：「具体的な取り組み」の文言が「取組」と「取り組み」の表記が混在している。また、表紙の絵についてだが、ジェンダーバランスの視点から修正をしたほうが良い。

V：イラストの修正は、現段階では困難なため、人の部分を除くか、差し替えることになる。

W：以前の提案にあったパズルのピース（まちキョンのもの）に戻してはどうか。

市：市のガイドラインに抵触するため、現行のイラストは使用できない。提案の通り差し替える。

X：6頁「行政と協働で取りまとめる手順」の箇所については、「地域（まち）」ではなく、市民の方がよいのではないか。また、その上の取りまとめ方法の箇所の「住民」も同様に「市民」としたほうが良い。

全員：異議なし。

### (3) 今後の仕組みづくり検討部会の取組について

A（会長）：ガイドライン作成に一区切りついたので、仕組みづくり部会として、次に何をしたらよいか。「仕組み」という観点で意見をいただきたい。

B：ガイドラインのコメントをもらうにあたって、各まち協から出ていたのは、どうやっ

て多くの人に参加してもらおうかということであった。多くの人に関わってもらおう仕組みについて検討してはどうか。まち協を条例として位置づけるなら、今まで以上に重みを持ってくる。重みを持ったら魂を入れなくてはならない。

- C：どこでも悩んでいるのが、「活動する人がいない」「活動をどう進めたらよいか」ということだが、その前の背景の部分つまり「まちづくり」ってなんなんだということを整理してはどうか。
- D：まち協はまだ地域の中で浸透はしていない。先日の運営委員会で半ば強制的に出てきてもらっていたPTAの人が、「参加して初めてまち協が何をしているか知った」と言っていた。そうして関心を持ってもらっても、1年が終わると去ってしまうのがほとんどだが、理解者は増えている。少しでも関わった人たちが、関わり続けてくれる体制を取れたらと思う。みんなからどのように意見を集めるかということも議論した。会議になったら意見が言えないが、サークル等では気軽に話をしていると、いろいろな意見が出てくるという話だった。「まちづくり」とは何かをまず知ってもらうことが大切だ。
- E：ひらがなの「まちづくり」と「街」「町」「づくり」とがある。「街」は道路などに面した場の一角、「町」は区画、「まち」は人の心の問題、つまり自分がどう思うかということだという説明を聞いたことがある。生活共通の意識の問題であるため「まち」に漢字は当てはまらない。「つくる」はいろいろな漢字があるからひらがな表記になっている。それを頭において「まちづくり」とは何ぞやと定義しておかないといけない。
- F：ある先生と話をしていて、「何故そこまでやるのか」と言われた。「まちを良くしたいから」と答えた。これから行政の予算が減少すれば、市民のことは市民でやらなくてはならない。それを実現するには、お金がもらえなくてもやることで喜びが生まれる仕組みが必要ではないか。
- G：「安心地区推進協議会」というのがあり、そこで「自分たちのまちを自分たちで良くしよう」というテーマでPTAの30、40代の人やサロンで活躍している方などに集ってもらい、今、住んでいるまちは良いまちなのか悪いまちなのかななどをざっくばらんに話し合ってもらった。他市から引っ越してきた人は、制度の違いがとても目につくとか、バスがないなどの意見があった。まちづくり協議会について聞くと、浸透していないことがわかった。もう少し知ってもらえるような方策を取って、わかってもらう、参加してもらおう必要性を感じた。この取り組みは継続していく予定であり、まちづくり計画づくりにつなげていきたい。
- H：社協に生活支援コーディネーターがいて、勤労世代にアンケートを取ったところ、地域活動には興味があるが、地域の情報がないという声が結構あることがわかった。
- I：宝塚に骨を埋める覚悟でまちを変えたいと思っている人がいる。でも、日本中ほとんどの方が住むところと働くところが別で、寝に帰ってくるだけ。制度がいいところがあったら引っ越してしまう。そういう人が多いと思う。覚悟を決めて住もうとする人は、「なんとかしたい」と覚悟を決めている。そう思う人が増えるかどうかの問題だと思う。
- J：まち協についてずっとやってきたが「協働の仕組みづくり」に関して行政の縦割りの問題や関連部署との関わりや情報が取りづらいというような市民側のやりづらさを改善するための仕組みづくりを大きい視野で提案できたらどうかと思うがどうか。

- K：それに関連して第2期の促進委員会のまとめの中で、協働の仕組みづくり検討部会にも「様々な団体との協働」について記載がある。
- L：ガイドラインづくりは1つの成果である。それを活用しながら、まちづくり計画を実際に進めて行くことが大切だ。20のまち協の横のつながりや、共有できることがある。それは市全体の計画づくりにもつながる。代表者交流会のみでなく、他にも話し合いの場が必要ではないか。
- M（会長）：まち協サイドで考えることと、促進委員会でやるべきことがある。先程、提案があったまち協以外の団体と市との協働の問題がある。
- N：まち協は傘みたいなものであるはずが、まち協と団体が別のものを担っている。これが一緒になれば、負担軽減になるのでは、例えば「放課後遊ぼう会」と「寺子屋」がある。青少年育成市民会議もある。これらをまとめていくことなども検討できればよい。
- O（会長）：行政が作った仕組みが地域にある。それを整理していく時期になってきている。
- P：市の総合計画にまちづくり計画が入ってくる。行政が本気で変わろうとしている。それに市民がついてきているだろうか。まち協自体が、まち協を知らない。追いついていくためには、まちづくり計画をつくった後の連携の仕組みを考えないといけない。まちづくり条例にまちづくり計画が位置づけられるとしたら、今度のまちづくり計画を実践していく仕組みが必要だ。
- Q（会長）：ここまでの議論を聴いていると、どのような協働があるかの情報整理が必要で、その中で喫緊の問題を取り上げる必要がある。地域や行政、NPOの協働など、宝塚市内でどのような協働があるかの動きについて議論して整理できるようなフリーな意見交換会ができればよいのではないか。また、「若い人」と一括りにはできない。例えば、自分たちで企画して動くタイプの学生、企画を与えてあげて初めて動くタイプの学生など様々。さらに勤労世代も色々なタイプがいる。NPOでも第1世代と第2世代とある。ボランティアではなく、職業として活動している団体も増えており、かなり多様化している。そういった様々なタイプの方々とどの様に協働していくか、戦略的にどの様に持っていくかを協議したいがどうか。
- R（会長）：堺市の西区で区民評議会というところで、若い人たちがどうやったら地域活動に参加できるのか、という答申を出した。その中で、戦略的に大学生、子育て層の方に入ってもらった。子育て層の方は非常にアクティブ。一人で映画の上映会などやってしまうほどの人だ。PTA活動を一人目の子ではやったが、大変だったので二人目の子の時にはやらなかったと言う。その理由は、日程や調整などが多いため自分のタイミングで活動ができない。やることが決まっていて、「〇〇日に手伝ってください」ということが多く、自分のペースと合わずにしんどいから、という本音が聞けた。「参加」と言うけれど参加の形態を変えていかないと、アクティブな若い方が二の足を踏んでしまう。色々なタイプの方が色々な動きをしていて、どうしてこの方々がくっつかないかということについての壁が見えてくる。
- S：写真を撮っている女性が、子どもを連れて撮影に行くことにこだわりを持っている。クライアントに子連れで写真を取りに行かせてくださいと頼んだら「どうぞどうぞ」と言われ、子どもがいたことで良い写真が撮れたという。クライアントは子連れで仕事をしている姿を見ることができてよかった、と言っていた。そういったアクティブ

な方は市内にもいる。審議会等にお母さんたちが行けないのは保育がないから。市にも提案しているが、審議会に保育をつければ、若いお母さんたちの声を聴くことはできる。その辺りを考えてみる時期がきたのではないか。まち協の会議でも子連れで参加できる会議をやってみては。宝塚NPOセンターでは、週に1回ボランティアに来て入力作業をしてくれるお母さんがいる。それによって良い雰囲気が出てきたりする。扉を開けば新しい動きがあるかもしれない。

T (会長)：吹田の千里山のまちづくりの会議にベビーカーを押して来られた方がいた。会議が終わったあと、勤務先を聞いたら、不動産会社で企画をしている方だった。かなり能力を持って仕事をしている方がまちづくりに興味を持っている。地域にいる若い世代でまちづくりに感心のある人が埋もれている。そのような人材をどのように活用していくかというのは一つのテーマかと思う。

U：ひらがな「まちづくり」の定義からするとすべてが「まちづくり」の一角。宝塚には「まちづくり協議会」に「まちづくり」を集約しようとしている。「まち協」だけがまちづくり専門家や担当者じゃなく、まちづくり協議会がいかにかまとめるかという視点で立つと、まちづくり協議会をしっかりと位置づけ、理解して進める必要がある。他市では、自治会や社協がやっているところもある。宝塚はそうではない方法をとっているということを理解していかないと、違う方向に言ってしまう。今の論議は「まちづくり協議会をどのように強化するか」ということになると思う。

V：今までこういったことを考えたことはなかった。でも、自治会の会議で「どうしても子どもがいるので出席できない」という声があったとき「一緒に来てください」といった。会場に畳を用意して、そこで遊ばせるようにした。全く意識していなかったが、それでその方も非常にホッとしたようだった。今話を聞いてこういったことは重要だと感じた。

W (会長)：今日はそろそろ終わりたい。次回は、市内にどのような協働の事例があって、うまく言っている事例や課題などフリーディスカッションで共有し、次のステップとして何に焦点を当てたらよいかを協議したい。参考になりそうな情報を持ち寄っていただきたい。特に社協の状況が共有できていないように思うのでぜひお願いしたい。

4 その他 特になし

5 閉会